

学校と家庭・地域の連携推進を図るための実践研究

－ 連携の“下地づくり” －

所属校：江戸川区立春江中学校

氏名：中西 孝

派遣先：早稲田大学教職大学院

キーワード：連携の下地づくり・つなぎ役・公開講座

I 研究の目的

学校と家庭・地域の連携（以下、連携）の必要性は、家庭の教育力が低下していること、子供のバランスのとれた成長を図ること、学校への地域人材の活用等のために、高まっている。「東京都教育ビジョン(第2次)」の取り組みをはじめ、全国的にも平成10年度の学習指導要領改訂に伴い様々なしくみが施され、取組が行われている。取組の多様性は、より良い連携を求めた試行錯誤の結果であり、答えが一つではないことを表している。学校においては「学校・地域にあった連携」を模索しているが、関係機関と調整を図り、軌道に乗せるまでには多くの時間と労力が必要である。そこで本研究では地域連携の考え方を先行研究と事例から学び、連携をする上での“下地づくり”に焦点を当てて、実践を通じながら検討することを目的とする。

II 研究の方法

1 文献研究

これまで行われてきた先行研究から連携の考え方や問題点を整理する。

2 実践研究

先行研究からみえてきた問題点をもとに課題解決のための取組を所属校において実践し検証する。

III 研究の結果

1 文献研究〔先行研究にみる問題点〕

学校と地域の連携を可能にする要件については以下のようなことが文献より明らかになった。

対等な関係を基本とし、様々な分野での相互乗り入れ型で継続的な関係を求めること（パートナーシップ論 佐藤ら 1999）、大人が関わることの発達段階上の必要性を説き、地域住民に対して“地域の子供”としての認識を求めること（教育コミュニティ論 池田 2000）、地域に存在する多様な協力者を学校の必要に応じて活用できるシステムの構築（地域教育プラットフォーム構想 東京都 2006）、校長のもつ人脈や強いリーダーシップによって学校と外部の人材・機関とをつ

なげていこうとすること（つなげる力 藤原 2008）である。

ここに紹介された考え方や根拠、特徴ある取組の内容は、連携にとって意義が大きい。しかしながら、これらの事例のあり方は、社会的・文化的な文脈が異なっているので、どの地域においても単純に適用すれば済むというものではない。地域によっては、学校と地域のつなぎ役が不在であるという問題を抱えるところもある。誰がそのつなぎ役となるのか、また連携をどう展開（活用）していくか等、実践のレベルでの課題は大きい。

したがって、重要なことはつなぎ役を育成すると共に学校と地域（保護者、地域関係者、教職員も含む）に対して「連携の必要性」の考え方を共有できるような働きかけ、すなわち“連携の下地づくり”が必要だということが明らかになった。

2 実践研究

対象校では、連携の意義を理解し『地域の中の学校』をスローガンとして連携に積極的に取組んでいるが、学校が期待する成果にはまだつながっていない。先行研究から把握された課題の①「つなぎ役」としては、PTA会長がその役割を担っているが一人に委ねられている側面が大きく、②地域からの理解も十分とは言えない。そこで、「学校理解」・「地域理解」の啓発、「つなぎ役の育成」が必要であると考えた。この課題を遂行するため、課題である“連携の下地づくり”の一方策として「公開講座（名称：セミナー）」を企画した。

公開講座の詳細は下記の通りである。

(1) 目的

学校理解・地域理解の推進、子育て支援、地域連携の啓発

(2) 方法

- ① 開催主旨についての説明（対象校・PTA・近隣小学校）
- ② 内容についてのデモンストレーション・意見交換（形式、参加対象、実施時期、講師等）

③ 広報活動（対象校保護者、地域関係者、近隣小学校5、6年生保護者）

(3) 実施日

第1回10月26日、第2回12月6日、第3回2月21日

(4) 内容

学校の様子、教師の子供の見方、地域連携の意義、生活指導の考え方、子育て支援等
1時間30分～2時間

(5) 運営協力

対象校PTA（PTA会長が「つなぎ役」）

(6) 講師

対象校校長、前対象校校長、現対象校主幹教諭、近隣小学校校長等

(7) 参加者

対象校保護者、近隣小学校保護者、地域関係者、対象校教員等

(8) 参加者の感想等〔レビューシート（双方向の学びとなるように毎回セミナー終了時に参加者に書いてもらう感想、振り返りシート）から一部抜粋〕

【第1回より】

- ・ 先生方の熱心な姿が印象的でした。来年度、安心して子供を入学させられます。
- ・ 子育てをすることの見直しができました。
- ・ 先生方が、学校を、子供たちを、保護者を少しでもよい方向へと考えているのだなと思いました。
- ・ とても良い企画だと思います。保護者だけでなく先生方が聞いてくださったのが有意義だと思いました。
- ・ 質の高い内容で自分のためになりました。

【第2回より】

- ・ 以前から子育てについて学びの場が欲しいと思っていました。
- ・ 自分自身の子育てとダブルところもあり、胸にグッとくることばかりでした。とても共感できることばかりでした。
- ・ 共感が持てる講演で感激しました。
- ・ とても楽しいセミナーなのでもっとたくさん企画してください。できたらまたいろんな先生方の話も聞きたいです。
- ・ 前回のセミナーに参加して、自分が集中して講座を聞ける時間が持てるのがとても貴重で、第1回に次回予告を聞いて、子育ての失敗談というのがとても聞きたくて参加しました。

3 実践研究の成果

《「学校理解」・「地域理解」の啓発》

公開講座後に毎回行ったアンケートから、保護者会とは違った“学び”について好意的な意見が大多数を占めた。内容についても満足度は高かった。PTA会長からは「公開講座を次年度も継続してやって欲しい」という声が聞かれた。以上のことから「学校が地域に対して働きかけている」という発信や「連携に対する具体的なイメージ」を伝えることとしては、効果があったものと捉えている。ただし、参加人数と実施回数から見ても、本研究のみで連携への下地づくりにつながったとは言いにくい。

《つなぎ役の育成》

今回の実践（公開講座）では、連続して参加している人がほとんどであることから、少数であっても将来的に連携の必要性を理解し「つなぎ役」になることが期待できるのではと考えている。このような理解者が広がるのが下地づくりの成果であり、関わった人たちがいずれは「自分たちの学校」「地域の中の学校」という意識を持ち、先行研究の成功事例で見られるような取組につながっていくのではないかと期待される。

IV 考察

上記の成果を踏まえ、今後の課題を考える。

それぞれの学校・地域にあった様々な連携の形が成り立つ条件として、連携への下地づくりやつなぎ役の育成が必要であることを説いてきたが、下地づくりは短期的・一過的なものでは効果がなく、継続的な取組が必要である。学校と地域の連携には、「地域の子供」という認識を持ち、協力し合いながらそれぞれの役割を担っていくことが理想である。したがって下地づくりで行う啓発活動の内容も、「地域の子供」という概念を広めるために「学校理解」「地域理解」「子育て支援」につながるものが適切であろう。

また、下地づくりやつなぎ役の育成をどこが担うかも検討するべき課題である。

本研究で試みた、教員と地域の代表による公開講座は、教員の地域への関わり方のモデルにもなり、地域視点をもつきっかけにもなり得ると考える。

今回の実践が地域連携の初期の取組として活用されることを期待している。